

## 大原社会問題研究所五十年史

## II 創立当初〔一九一九～二二年〕

## 研究所新築工事落成す

研究所の事務所はすでに記したように、大原氏が十万円を投じて買収した天王寺秋ノ坊の敷地（大阪市天王寺区伶人町二四）に、一五万円の費用を投じて建てたもので、その様式はベルギーのソルヴェー研究所を模したものとされる。本館は二階建二〇四坪、堅牢な三階建書庫延九九坪その他附属建物から成り、本館は研究室、図書整理室、編集室、資料室、閲覧室、会議室を備え、さらに第二部の社会衛生関係の施設として疲労生理実験室も造られた\*。

\*この建物はその後、三階建書庫一六二坪、二階建講堂二八坪等が増築された。

七月九、一〇両日にはそこに華々しく開所式が開催された。九日は所の関係者、所員その他による祝賀会、一〇日は二五〇名に及ぶ一般の参加者を迎えて盛大な祝賀会が催された。なおこの日の評議員会（出席大原、柿原、河田、米田、高田、高野氏、欠席河上、小河氏）は櫛田民蔵、久留間鮫造両氏を欧米に派遣、研究と図書蒐集に当らせることを決定した。大原社会問題研究所はここに礎石をすえ、充実した陣容をもって発展の第一歩を踏み出したのである。

高野氏の東大復帰については、山崎、矢作教授らを介して話がすすめられていたが、八月にいたり復職はことわり、経済学部講師として統計学の講義を担当するに止めた。森戸事件と経済学部のとった処置に抗議して東大を去った櫛田氏は、七月二四日の役員会で専属の役員として海外に留学せしむることがきまり、さらに大内兵衛、権田保之助、細川嘉六、山名義鶴の諸氏が研究嘱託となった（九月二八日）。細川氏はその直後、東大助手の職を辞した（権田、細川、山名の三氏は、のち役員となった）。

法政大学大原社会問題研究所五十年史

発行 1970年11月

編・発行法政大学大原社会問題研究所

[前のページ](#) ← 法政大学大原社会問題研究所五十年史【目次】 → [次のページ](#)

研究活動・刊行物 [OISR.ORG全文検索](http://oisr.org)

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)